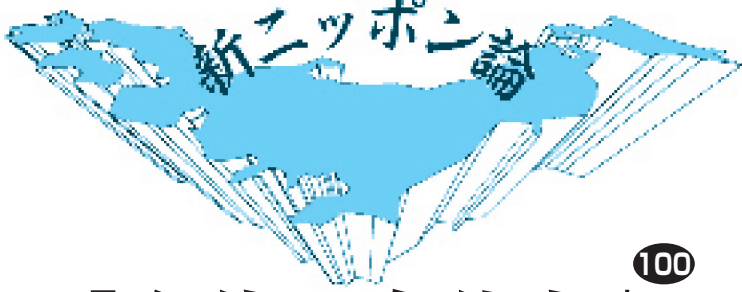


田中康夫の



100

「全体の奉仕者」

「パブリック・サーバント」即ち「公僕」は田中康夫の政治的態度の最も基調にある」。2000年12月8日に長野県議会で行った所信表明演説を踏まえ、批評家の

大塚英志氏が『Voice』2001年2月号に寄稿の「田中康夫の『サービス』精神」。

★次号の1月号の発行口は「新ニッポン」。

人にも要求してきた「倫理」であり「思想」。「この「サービス」精神は政治家が支援者に見せる男芸者の振る舞いとは全く異なる。滅私奉公的な雑巾掛けとも異質だ。田中は田中という「個」である為に彼の職能に常に忠実であるだけの話で、自立した個人がそれぞれの職能の中の局面局面で互いに真つ当な「奉仕者」であるというのが田中の中にある社会システムの理念。「自分探し」や近頃のガキを叩き直す「奉仕」は決して「サービス」ではない。

大塚英志事務所アカウント「大塚八坂堂」は昨夏の横浜市長選挙期間中、「人が人にサービス（奉仕）する事を巡る思索が神戸震災の時のボランティア、そして政治家になっていく中で自身を「パブリック・サーバント」と定義していく過程は筋が通っていて、その自前の思想は信用できる」と、更に阪神・淡路大震災から27年目の今年1月19日には「田中康夫的な意味でパブリックとか公という言葉を正面から使える人はあまりいない。政治の世界でも論議でも」とツイート下さいました。

も拘らず県議会議員達が、いやだから、いやだという（気分）で（バンザイ突撃（玉砕））を敢行した。田中氏以前の知事と仲良くやってきた人達にとつては、刺身にジャムと納豆とチーズを付けて食べる、と言われたようなものではないだろうか」と述べています。